

スズランにおうあした

山田 葵 作 こさかしげる 絵



913 やまだ あおい

童話の城 5

スズランにおうあした

山田 葵・作 こさかしげる・絵

岩崎書店 1986 121p 22cm

童話の城 5
スズランにおうあした

一九八六年四月一〇日 第一刷発行

著 者 山田 葵

発行者 大川松利

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九一―

二―一―二 電話八一二・九一三二

振替 東京七―九六八二二

印刷 株式会社KMS(本文)

三美印刷株式会社(表紙)

製本 小高製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

ISBN4-265-01805-X

© Aoi Yamada & Shigeru Kosaka

Published by IWASAKI SHOTEN, Tokyo, Japan

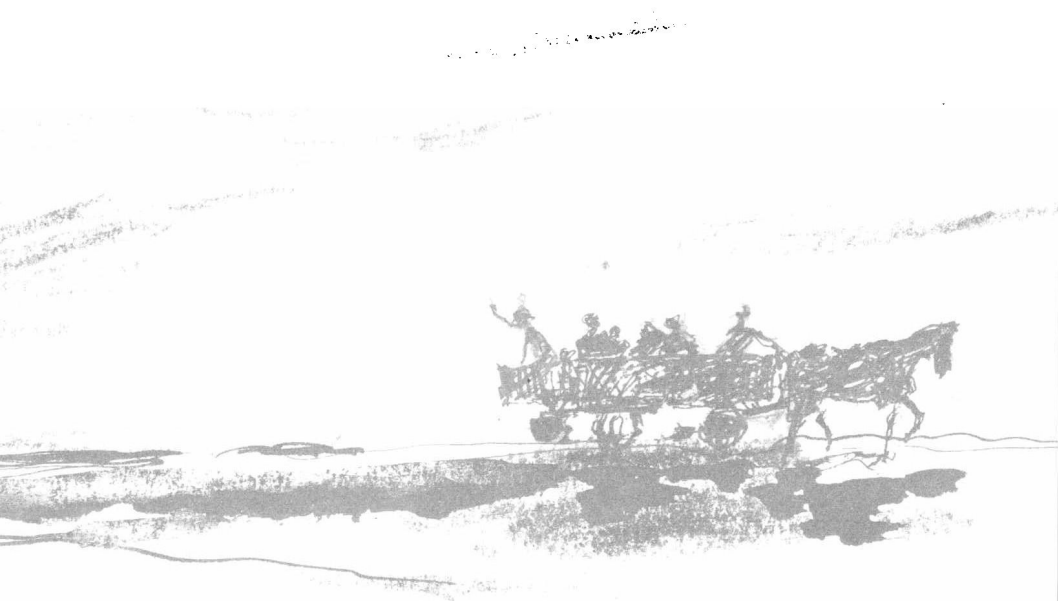


スズランにおうあした

山田 葵作 ● こさかしげる 絵

もくじ

1	うれしい朝 ^{あさ}	6
2	スズランの原野 ^{げんや}	21
3	赤いリボンの女の子 ^{めいご}	37
4	クリよ、走れ ^{はし} ！.....	60



5 クリがあぶない……………88

6 スズランのかおりながれて……………107

あとがき……………121

表紙・さしえ　こさかしげる



スズランにおうあした



1 うれしい朝^{あき}



ぐっすりねむっていた明夫^{あきお}は、ゴ
ドゴドという音^{おと}を、ゆめうつつにき
いた。

なんの音^{おと}だろうとおもうつちに、
はっと、氣^きづいた。

「そうだ、おきるんだ」

くつついてはなれないまぶたを、
ゆびでひきはなし、やっと目^めをあけ
た。

あたりは、まだまっくらだ。でも、
おきなくてはならない。きようは、
大^{おお}あんちやくつついて、元^{もと}別の、

祭礼競馬さいれいけいばにいくんだ。

大あんちやが、うちのクリ毛けにのって走るはしんだ。

とうちゃんの目めをぬすんで、ひろい開拓道路かいたくどうろをつつ走ばしっている、日ひごろのうでまえをみせる日ひだ。

ゆうべは、たいへんだった。

「いそがしいときに、馬うままでもちだすだと？ 畑はたけの仕事しごとはどうするんだ」

と、どなりつけるとうちゃんに、大あんちやはひぎをそろえてすわり、

「たのみます、たのみます」

と、いがぐり頭あたまをさげつづけていた。

「とうちゃん、畑はたけのほう、おれががんばるからよ」

小あんちやは、みかねて、おうえんしていた。小あんちやは、大あ

んちゃとは、一さいちがいの十六さいだ。

とうちゃんは、ぎよろつとした目を、小あんちやにむけると、

「総領息子が、あてになんねえじゃ、どうなるんだ」

といつて、火をおとしたストーブに、たばこの先をこすりつけてけした。

これでどうやら、大あんちやがでかけてもいいというようすになつてきたときだ。

「明夫もいっしよに、大あんちやについていくんだと」

マキねえが、すつとんきようなこえをあげた。マキねえは、明夫より一つ年上の四年生だ。いいつけ口の名人だ。

「なんだと」

とうちゃんのぎよろ目が、またひかった。おそろしさに、明夫はか



らだをちぢめた。

かあちゃんは、だまりこくって、茶ちゃをついでいた。

大あんちやが、小ちいさいこえでいった。

「小ちいさい子こはむりだ。つれちやいかねえ」

なんだ、大あんちやは、おれをつれていくといっておきながら、じぶんまでいけなくなったらたいへんと、氣きもちをかえるなんて、そんなことって、あるか。

明夫あきおは、むちゆうでくいさがった。

「おれ、もう九さいだぞ。三年生ねんせいだ。山やまごえだって、どんどん歩あるけるさ。クリのめんどろだつてみれるぞ。じやまなんぞしないや」

とうちゃんや、大あんちやの顔かおを、にらみつけるようにしていった。そして、

「だから、きょう、ブタ小屋こやのそうじだつてやったし、いもだつては
こんだんだ」

といったときには、なみだがあふれてきた。

「どうだ？」

つていうとうちゃんに、大あんちやが、

「おれは、つれていったつていい」

そういつてくれたんだ。これで明夫あきおの元別もとしべついきはきまつた。

明夫あきおは手さぐりで、シャツ、ズボンをはひつつかんで、板いたの間のへや
へでていった。

ストーブには、ふとい根ねつこがつつこんであつて、ほのおが、そと
にあふれていた。

ストーブのうえにのつたなべから、うまそうなみそしるのにおいが、

もやもやとながれている。

ストーブのそばで、いそいでズボンをはき、シャツと、うすいセーターをきた。

うんどうぐつをつつかけて、土間にたったとき、

「よつく、目あいたな」

台所のガラス戸をあけて、かあちゃんがはいつてきた。

「大あんちゃんは？」

「馬っこのとこだ」

かあちゃんは、その馬小屋のほうを、あごでしゃくつた。

そとにでた。ひやりとした空気が、ほったにさわる。ようやく明けようとする空に、星が、おちそうなほど、ちかくひかっていた。

北海道中津幌の、六月の夜明けだ。

馬小屋^{うまこや}で、音が^{おと}している。

「大あんちや^{おお}」

「明夫^{あきお}か、おきれたのか」

十七さいにしては、こがらで、ずんぐりした大あんちやである。えさづくりの手を^てやすめず、顔^{かお}だけあげていった。くらくてみえないが、明夫^{あきお}へにつこり、えがおをむけたようだ。

馬屋^{うまや}のはりにつるした、はだか電球^{でんきゅう}の光^{ひかり}がオレンジ色^{いろ}の輪^わをつくつて^ている。

「うまいえさ、つくつてやるんだね」

明夫^{あきお}がのぞいた。

「えんばくをまぜてやるんだ。きょうは、なんていったって、かけるんだからな。うまいものくわしとかなきや、力^{ちから}がつかない。な、クリ」

顔をたたかれて、クリ毛の馬うまつこのクリはふふっーんと、はなをならした。

「大あんちや、たくさん、くわしてやるんだな」

「それがよ、やりすぎちゃいけないんだ。走るまえは、うまいものをちつとすくなめに。はらいっぱいじゃ走れない。これがコツさ」

「ふうん」

明夫は、大あんちやの馬のあつかいには、いつもかんしんしてしまふ。

ゆうべ、とうちゃんの前にかしこまって、いかせてくれと、頭をさげていたすがたとは大ちがいだ。自信にあふれた、やさしい大あんちやである。

大あんちやは、六人きょうだいのふたりめだが、男では一ばん上。

とうちゃんがたよりにしたい長男ちようなんなのに、百姓ひやくしやうしごと仕事はだめ。明あけても暮くれても、馬うまのせわがしたい馬うまきちだ。

小ちいあんちゃは、この春はる、中学ちゆうがくをそつぎようしてから、畑はたけしごと仕事によくせいをだし、とうちゃんのかたうでになっている。

明夫あきおは、六人にんめのすえつ子こである。

ついでにしようかいすると、大ねえちゃは二十さい。秋あきのとりいれがすんだら、となりの開拓かいたくむら村へ、よめいりすることになっている。はたらく手てをとられちゃこまると、しぶるとうちゃんだったが、気きにいられて、ぜひともしうことで、いくことにきまった。

大ねえおおちゃは、このごろはしやぎがちで、よくかる口くちをたたくようになつた。

中学ちゆうがく三年生ねんせいのタミ子こねえは、はたらきもので、大ねえおおちゃとなかよ